

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00014

研究課題名（和文）脱人間化社会における責任概念の再考：哲学・思想史・応用倫理の架橋的アプローチ

研究課題名（英文）Reconsideration of the concept of responsibility at the age of dehumanization : cross-disciplinary approaches of philosophy, history of ideas and applied ethics

研究代表者

渡名喜 庸哲 (Tonaki, Yotetsu)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：40633540

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は科学技術の発展や産業構造の変化に伴う現代社会における「責任」概念の変容に焦点を当てた。研究計画で掲げた四軸のうち、1)社会思想史のアプローチとして、F・エヴァルドにおける近代社会制度の展開における「責任」概念の変容については、その主著『福祉国家』の翻訳を進めた。2)政治哲学的アプローチとして、全体主義および原爆投下をめぐるH・アーレントとG・アンダースの思想の検討、3)現象学的アプローチとして、E・レヴィナス哲学における「応答責任」概念の実践的な文脈への接続、4)応用倫理のアプローチによるAI開発・利用における「責任」の変容に関しては十分な成果を挙げる事ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は第一に、従来から哲学・倫理学において多くの蓄積のある「責任」概念に関して、それを現代の科学技術社会という文脈において具体的に考察した点にある。とりわけ従来は分析哲学や倫理学分野で理論的な検討がなされていたのに対し、思想史、現象学、AI倫理の各分野を横断するかたちでこれに多角的な検討を施した点は特筆すべきだろう。社会的意義に関しては、とりわけAIやロボットの責任をはじめとして、今日の社会において「責任」概念の再考が求められているが、これに対して理論的な検討の枠組みを提示することができた点にある。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the transformation of the concept of “responsibility” in modern society in line with the development of science and technology and changes in industrial structure. Among the four axes of the research plan, 1) from the social thought historical approach, we have translated F. Ewald's “The Welfare State” in order to study the transformation of the concept of “responsibility” in the development of modern social institutions; 2) from the political philosophy approach, we have examined the ideas of H. Arendt and G. Anders regarding totalitarianism and the atomic bombings; 3) from the phenomenological approach, we have studied the concept of “responsibility” in the philosophy of E. Levinas in order to connect it to the practical context; and 4) An applied ethical approach to the transformation of “responsibility” in the development and use of AI.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：責任概念 エマニュエル・レヴィナス ハンナ・アーレント ギュンター・アンダース フランソワ・エヴァルド AI倫理

1. 研究開始当初の背景

「責任」概念については、哲学・倫理学はもとより、社会学・法学・政治学等のさまざまな領域においてさまざまな角度からの検討がなされてきた。共同責任論と個人責任論の区別という前提に立てば、大局的には、個人責任論には次のような二つの立場がある。一つは、哲学におけるように、「責任」概念を、行為の結果とそれを引き起こした何らかの原因（意図や自由意志）との因果的な関係という問題設定のもとで（これらの概念および関係性はさまざまに解釈されるところとはいえ）検討するアプローチである。あるいはエマニュエル・レヴィナスにおける「応答可能性」としての「責任」概念は一定の注目を集めているが、具体的・実践的なかたちで解釈されてはこなかったものもある。もう一つは、社会学・社会思想におけるように、全体主義やファシズム等の組織的な犯罪への加担に対する個人的責任の有無を論じたり、あるいは現代における社会システムの複雑化に伴った帰責関係の錯綜化に注目するようなアプローチである。前者においては、とりわけ分析哲学の領域において、「自由」および「行為」との関係において「責任」概念の精緻な理論化がなされる一方、後者においては、むしろ「無責任の体系」（丸山眞男）や「ヒューマンファクター」との関連で捉えるシステム論的解釈（チャールズ・ペロー）という枠組みが優勢となる。ここでは、むしろ「責任」概念の希薄化が問題となる。これらとは別に、「責任」概念は近代主体主義的な「虚構」にすぎないとしてその理論的妥当性が疑われる場合もある（小坂井敏晶）。

他方で、近年の社会システムの一層の複雑化、ICTや遠隔技術をはじめとする科学技術等の発展における人間の「行為」の代替化、ビッグデータ・AIによる「判断」能力の自動化といった状況に照らすと、人間もしくは非人間の行為に関する「責任」の問題を具体的かつ理論的に考察する社会的要請はこれまで以上に増している。こうした状況下において、一方で「行為」の社会的・技術的条件を捨象することなく、他方でシステム論的解釈のもとで容易に「責任」概念を手放すことなく、「行為」や「判断」の「脱人間化」という具体的な条件のもとであらためて「人間」の「責任」を改めて問う必要が生じてきているように思われる。

2. 研究の目的

本研究は、こうした学術的・社会的背景に基づいて、現代のような高度にシステム化した社会における「人間」の「責任」という問いを、哲学・倫理学を基盤にしつつ、社会思想史や政治哲学の従来議論を参照・再解釈することで検討してゆく。それにより、従来のような「個人」に力点を置く哲学的検討と、「社会」ないし「システム」に力点を置く社会学的ないし社会思想的検討の相互の欠陥を補いつつ、両者を架橋しながら、新たな「責任」論を提示することが本研究の目的である。

現代の技術的・社会的な変動のなかで「責任」概念を従来のかたちで検討するためには、複数のアプローチの交差が必要不可欠であると思われるが、本研究は、研究代表者のこれまでの研究をもとに、以下の四つのアプローチを設定する。[1] 社会思想史のアプローチ、[2] 政治哲学的アプローチ、[3] 現象学的アプローチ、[4] 応用倫理学的アプローチ。こうした諸領域を架橋する領域横断的なアプローチにこそ本研究の学術的独自性が存する。

3. 研究の方法

本研究は、上記の四つのアプローチに関して、それぞれ以下のような研究を行う。

(1) 社会思想史のアプローチ ここでは、とりわけフーコーの助手を務めたことで知られるフ

ランソワ・エヴァルド『福祉国家』をもとに、「責任」概念が近代的社会制度の展開とともにどのように変容してきたかを検討する。同書は、フランスにおける「福祉国家」の生成を追った書物であるが、単なる政治制度史研究にとどまらず、「福祉国家」とともに成立した「労働災害」という概念の思想史意味を検討するものである。具体的には、18世紀型「自由主義」から19世紀に「福祉国家」が成立し、「責任の社会的分担」という事象が生み出されたことの意味が、20世紀以降の「生政治」の展開および「新自由主義」社会の誕生との関連から検討されている。エヴァルドが本研究にとって重要なのは、第一に、近代における社会の制度化における「責任」概念の変容について大きな見取り図を提示している点、第二に、「責任の社会的分担」という事象についての検討可能性を開く点にある。つまり、ここではたとえば労働者の個人的な行為が原因となって生じた「事故」について、それが業務命令の管轄化でなされたものであればその責任が阻却されるようになったが、こうした論理がどのように理論的・社会的正当化を得られたかを検討できるということだ。エヴァルドの議論は欧米では極めて重視されており、日本においても社会思想史の文脈では一定の注目を集めているが（田中、重田、西迫）、管見の及ぶかぎり、そこにおける「責任」概念の意義についての哲学的な検討はまだなされていない。

(2) 政治哲学的アプローチ ここでは、全体主義体制および原爆投下をめぐるハンナ・アーレントとギュンター・アンダースの省察の哲学的な意義を再考する。これらのテーマはいわば「手垢にまみれた」ものともいえるが、とはいえ研究状況を調査してみると「責任」の問いは手付かずであることに気づく。アーレントについては、アイヒマン裁判における「無思考」およびそこから「思考」および「判断」論に関心が集中しており、とりわけ『責任と判断』における「責任」論にはあまり注目が集まってこなかった。本書は、同書における「責任」論に注目するが、その理由は、単に、そこで全体主義というそれ自体が伝統的な倫理的規範から逸脱したシステムにおいてどのように個人の責任を考へるかという眼界事例が提示されているからではない。むしろ根本的な問題は、組織自体の倫理性がどのように判定されるかに関わらず、自らの意志と無関係に組織の指示に従った行為についてどのように「責任」を考へるかにあるだろう。この点は、アメリカによる原爆投下の倫理的正当化をめぐる現代倫理学の「正戦論」的アプローチ（ウォルツァー、ロールズ）と関連するが、本研究は、アンダースが、原爆投下に携わったパイロットとの対話のなかで指摘し発展させた問題に注目する。つまり、原爆投下という行為を命ずる命令自体が社会的ないし政治的に正当化される場合に、良心の呵責など個人における倫理感情が不要になり、人間の行為の機械化・自動化が求められるという問題、命令・規則の遵守における責任の所在という問題だ。社会学におけるシステム論的な「責任」論を批判的に検討するためにも、アンダースの発想は哲学的な整理・検討を加える余地を多分に残している。

(3) 現象学的アプローチ ここでは、研究代表者がこれまで最も中心的に研究を進めてきたエマニュエル・レヴィナスの現象学的哲学における「責任＝応答可能性」概念を実践的な文脈へと接続しうるかたちで検討しなおす。レヴィナスの「責任＝応答可能性」概念はきわめて晦渋なものと映るが、研究代表者はこれまでの研究において、この概念が、ハイデガーの実存論的分析論を換骨奪胎することによって案出された、人間存在のある種の行為遂行的な存在様態を示すものとして理解しうることを示した。そこでは、単なる情報伝達ではなく、「意味」を生成させることのできる能力/可能性として「責任＝応答可能性」が理解されるが、この「意味の生成」という観点においてこそ、「人間と非人間の微小の差異」が見極められるとされる。ここでは、「責任＝応答可能性」は対人間的関係においてしかありえないことが含意されているが、こうした

発想の意義を検討すべきだろう。近年、一部では、レヴィナスのこうした「人間的」な責任論を、たとえば(「機械」は「応答」しうるのかといった問いのもと)「機械」との対比で捉える研究が進められている。本研究はそうした研究を参照しながら、レヴィナスの「責任 = 応答可能性」を「人間」の「責任」の臨界点を描く概念と理解し、そのことによってその概念がどのように実践的な意義を有するのかを示す。

(4) 応用倫理的アプローチ 研究代表者はフランスの哲学者グレゴワール・シャムユーの遠隔無人戦闘機の倫理的問題を検討する『ドローンの哲学』の翻訳以来、現代の ICT および AI 技術の進展における人間の行為の代替化における倫理的問題 に一層の関心を寄せ、研究状況のサーヴェイを行なっている。また、同時に、介護保険事業における AI の活用を検討するワーキンググループに委員として携わり、倫理的観点からの知見提供を行なっている。これらの研究・実践に基づいて、とりわけ AI および遠隔技術の産業活用に関連して、これまで人間が担っていた行為(たとえば介護や殺害)の技術的代替化(脱人間化)がどのような「責任」概念の変容を要請するのか について、具体的な論点を抽出・整理した上で、上記(1)～(3)の理論的研究の成果と照合させながら哲学的な検討を加える。

4. 研究成果

今研究の成果は上に示した四つのアプローチそれぞれに応じて以下のようにまとめられる。

(1) 社会思想史的アプローチ この点では、フランソワ・エヴァルド『福祉国家』の翻訳を進め、600 頁におよぶ原著をほぼ訳出し終えることができた(2024 年度中に公刊が予定されている)。エヴァルドは、労働災害(accident du travail)という制度が19世紀に登場したことに目を向け、ここで偶然的な「事故(accident)」とみなされて、かつ従来の自由主義的な哲学のもとでは自己責任のもとで回収されていたものが、19世紀の社会保険や相互扶助の制度化とともに、どのように社会的な分担の対象になったのを検討している。この翻訳作業を通じて、「事故」および「責任」概念が近代的な社会制度の展開とともにどのように変容してきたかを跡付けることができた。

エヴァルドの議論そのものについての総括は今後の課題として残るが、本研究期間中になし得たのは、エヴァルドの議論を次の二つの観点からまとめ直すことである。一つは、日本哲学会欧文学会誌の巻頭論文「哲学問題としてカタストロフ」において、「災害(カタストロフ)」に関する西洋の思想史のなかで、このエヴァルドの概念がどのように位置づけられるのかを示した。もう一つは、『現代フランス哲学』において、フーコーの生権力および統治性概念に関する思想史/系譜学の企ての継承者として、エヴァルドおよびジャック・ドズロを取り上げ、両者の思想史的研究が、社会的なもの の再考という80年代のフランス思想の流れのなかでどのように位置づけられるのかを示した。

(2) 政治哲学的アプローチ この点では、とりわけハンナ・アーレントにおける「責任」概念の検討を始めた。第一に、アーレントにおける「責任」問題は、彼女が体験した収容所経験や全体主義支配と無縁ではない。この点で、紀要に投稿した「アーレント・難民・収容所」(2021 および 2022)において、アーレントにおける難民の地位および収容所の問題を整理した。

また、『アーレント読本』に寄稿した論考「責任・道徳・倫理 アーレント責任論の意義と限界」は、本研究におけるこの政治哲学的アプローチにおける最も大きな成果と言える。ここでは、ア

ーレント思想における『全体主義の起原』(1951)および『人間の条件』(1958)という二つの主著においては「責任」の問題が構造的に理論化できないことを指摘すると同時に、アイヒマン裁判以降にアーレントがどのように「責任」の問題を論じたのかを批判的な観点も含めて論じた。

アンダースに関してはすでに研究の蓄積があるが、とりわけ本研究の最も中心的な成果といえる学会報告「脱人間化社会における責任」について、アーレントとアンダース双方における「責任」概念のアプローチの特殊性および意義について論じた。

(3)現象学的アプローチ この点ではもっとも豊富な研究成果を出すことができた。まず、『レヴィナスの企て『全体性と無限』と「人間」の多層性』(2021)においては、従来の研究に基づきつつ、本研究にも接続するかたちでレヴィナス哲学に関する私の研究の基本的な立場を示すことができた。また『レヴィナス読本』に寄稿した「レヴィナスと福祉」(2022)においては、レヴィナスの「責任」概念が社会福祉学のなかでどのように論じられているか、また社会福祉の実践においてどのように援用できるかを示し、本研究[4]応用倫理的アプローチとの関係を示すことができた。社会福祉および「ケア」とレヴィナス思想の関わりについては継続的に調査をし、とりわけこの分野で国際的に研究を主導するコリーヌ・ペリュションを招聘し、国内において数回研究集会を開催した。これに関連して、ペリュションの主著『レヴィナスを理解するために——倫理・ケア・正義』(2023)の翻訳も公刊した。レヴィナス研究におけるもう一つの軸はロボットやAIなどの非人間的なものとの関わりである。これについては、2022年にフランスで開催した国際シンポジウムにおける口頭発表「レヴィナスにおける「人間と非人間のあいだの微細な差異」について」において基本的な立場を示した(2023年に公刊)。また、コロナ禍で飛躍的に活用されたZOOMをはじめとする遠隔的なコミュニケーションを題材にして、遠隔技術社会における「倫理」の在り方についての検討を行い、2021年に二つの論文を公刊した。

(4)応用倫理的アプローチ 応用倫理的アプローチにおいては、研究成果は以下の三つのトピックのもとにまとめられる。一つは遠隔技術である。上述の遠隔技術とレヴィナス思想に関する論文に加えて、「「内戦」時代のドローン "人間狩り"の時代と倫理」(2020年)では現在のドローンの活用における倫理的な問題を論じた。もう一つは、介護・福祉・ケアである。上述の「レヴィナスと福祉」に加えて、「介護分野へのAI活用における倫理的課題」(2020年)においては、現在開発が進む社会福祉におけるケアプラン作成におけるAIによる支援という事例を取り上げ、そこに含まれる倫理的課題を示すとともに、それに対する基本的な考え方を整理した。また、2023年にフランス・ディジョン大学で行われたデジタル社会における介護・ケアを主題とするシンポジウムに招聘を受け、日本のいくつかの事例を通じて「ケアにおけるデジタル技術の活用における倫理的問題」を論じた。三つ目はAIである。2023年より所属する立教大学文学部内でAI倫理に関する共同研究を立ち上げ、これについての検討を行ってきたが、この共同研究の枠内で、本研究の成果を示すかたちでの口頭報告「AIを哲学する?」(2024)を行い、AIの責任という問題に関する哲学的アプローチの意義を論じた。

なお、先にも付されたように、以上の本研究の成果の全体は、2023年の学会シンポジウムでの招待講演「脱人間化時代の「責任」について」(2023)において、その概要を示した。同講演については2024年度中に公刊が予定されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 5
2. 論文標題 「災後のしなやかさ 東日本大震災以降の「レジリエンス」の広がりについての批判的検討」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『環境倫理』	6. 最初と最後の頁 58-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yotetsu TONAKI	4. 巻 6
2. 論文標題 Catastrophe as a philosophical issue: Preface to Special Issue on “Philosophy of Catastrophe” of Tetsugaku. 6	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan	6. 最初と最後の頁 6-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 22
2. 論文標題 「アーレント・難民・収容所（2）」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『境界を超えて：比較文明学の現在』	6. 最初と最後の頁 47-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 128
2. 論文標題 「現象学的弁証法の彷徨：松田智裕『弁証法、戦争、解読 前期デリダ思想の展開史』に寄せて」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『立命館大学人文科学研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 26
2. 論文標題 「遠隔時代における身体 シアマユー/レヴィナスとともに」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『フランス哲学・思想研究』	6. 最初と最後の頁 99-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 49 (1)
2. 論文標題 「遠隔と接触：リモート時代におけるレヴィナスの「顔」」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 120-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 8
2. 論文標題 「「内戦」時代のドローン "人間狩り"の時代と倫理」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『福音と世界』	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 21
2. 論文標題 アーレント・難民・収容所 (1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『境界を越えて：比較文明学の現在』	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「レヴィナス的政治は「他者」をどうするか」
3. 学会等名 レヴィナス協会第6回大会シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 災後のしなやかさ:レジリエンス批判
3. 学会等名 東京大学東アジア藝文書院シンポジウム「香港、福島、水俣、その思索的巡礼」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 ナンシーとレヴィナス sensについて
3. 学会等名 際シンポジウム「ジャン＝リュック・ナンシーの哲学 共同性、意味、世界」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yotetsu TONAKI
2. 発表標題 De l'"infime difference entre l'homme et le non-homme" chez Levinas
3. 学会等名 Colloque de Cerisy: Levinas et Merleau-Ponty, le corps et le monde
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「介護分野への AI 活用における倫理的課題」
3. 学会等名 第2回日本在宅医療連合学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「AIを哲学する?」
3. 学会等名 AI倫理共同研究プロジェクト第2回公開研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「脱人間化時代の「責任」について」
3. 学会等名 立正大学哲学会2023年度大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「パンデミックはいかなる「生」を問題にするか:現代フランス哲学の立場から」
3. 学会等名 哲学会第62回研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yotetsu TONAKI
2. 発表標題 Des problemes ethiques autour des usages des technologies numeriques dans le soin : le cas du Japon
3. 学会等名 Colloque : Ce que le numerique fait au soin : de l' IA a l' intelligence clinique (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 西山雄二・柿並良佑編 (担当:共著, 範囲:渡名喜庸哲「ナンシーとレヴィナス sens について」 (237-259ページ))	4. 発行年 2023年
2. 出版社 読書人	5. 総ページ数 382
3. 書名 『ジャン=リュック・ナンシーの哲学: 共同性、意味、世界』	

1. 著者名 レヴィナス協会、渡名喜 庸哲、藤岡 俊博、石井 雅巳、犬飼 智仁、小手川 正二郎、佐藤 香織、長坂 真澄、服部 敬弘、馬場 智一、平石 晃樹、平岡 紘、村上 暁子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナス読本	

1. 著者名 ジャン=ピエール・デュピュイ著、渡名喜庸哲訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 292
3. 書名 カタストロフか生か	

1. 著者名 菅 利恵	4. 発行年 2023年
2. 出版社 共和国	5. 総ページ数 336
3. 書名 ドイツ語圏のコスモポリタニズム	

1. 著者名 杉村 靖彦、渡名喜 庸哲、長坂 真澄	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 『個と普遍 : レヴィナス哲学の新たな広がり』	

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 528
3. 書名 『レヴィナスの企て 『全体性と無限』と「人間」の多層性』	

1. 著者名 日本アーレント研究会、三浦 隆宏、木村 史人、渡名喜 庸哲、百木 漠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 430
3. 書名 『アーレント読本』(担当箇所: 渡名喜庸哲「責任・道徳・倫理 アーレント責任論の意義と限界」)	

1. 著者名 Orietta Ombrosi (ed.), Yotetsu TONAKI, Francesco Miano, Raola Ricci Sindoni, Pablo Dreizik, Maria Letizia Pelosi, Yuji Nishiyama, Emilia D'Antuano, Patrick Wassort, Irene Kajon, Joseph Cohen, Raphael Zagury-Orly, Wolfgang Plastino et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Mimesis	5. 総ページ数 314
3. 書名 Il nucleare: una questione scientifica e filosofica dal 1945 a oggi (担当箇所: Yotetsu TONAKI 「Gunther Anders or the transformation of "human" after Hiroshima」)	

1. 著者名 コリーヌ・ペリュション、渡名喜 庸哲、樋口 雄哉、犬飼 智仁	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナスを理解するために	

1. 著者名 渡名喜 庸哲	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 現代フランス哲学	

1. 著者名 Corine Pelluchon et Yotetsu TONAKI	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Hermann	5. 総ページ数 320
3. 書名 Levinas et Merleau-Ponty. Le corps et le monde	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 Colloque de Cerisy: Levinas et Merleau-Ponty, le corps et le monde	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 コリーヌ・ペリュション『世界を修復する:人間たち、動物たち、自然』をめぐるセミナー	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 コリーヌ・ペリュション『レヴィナスを理解するために』をめぐるセミナー	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 ジョスラン・ブノワ特別セミナー/講演会	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	フランス	ディジョン大学	ギュスタヴ・エッフェル大学	パリ大学
オーストリア	リンツ大学			